

コンプライアンス推進室の活動について

法人部

コンプライアンス推進室の目的と推進体制

コンプライアンス推進室は、2016年3月に略式命令を受けた廃棄物処理に係る法令違反を契機に、事件の再発防止と社会からの信頼回復に向け、コンプライアンス機能の強化及びガバナンス改革の一環として、2017年11月に法人部に設置されました。その目的は、教職員のコンプライアンス意識の浸透や不正行為の未然防止を図るとともに、各学校・部課におけるコンプライアンス推進の取組みを支援することです。

また、コンプライアンス・マネジメントの基礎となるコンプライアンス推進体制は、同志社コンプライアンス推進規程第3条によりコンプライアンス推進統括責任者は理事長とし、同第4条に法人部は法人事務部長を、法人内各学舎は学舎長をコンプライアンス推進責任者と定め、同第5条のコンプライアンス推進担当者は課長・事務長とすることが大学の部課事務打合せ会で報告され、法人内各学舎も同様の体制を確立しています。

コンプライアンス推進室の活動概要

コンプライアンス推進室における推進活動の中心は、コンプライアンス推進担当者等に対する啓発、意識向上などを目的に、毎年コンプライアンス研修を開催し、本法人に

コンプライアンス推進室事務室

おけるコンプライアンス意識を向上させることにあります。同志社コンプライアンス推進委員会は、同志社コンプライアンス推進規程第7条に基づき設置された委員会であり、毎年3回程度開催され、コンプライアンス研修をはじめとする活動計画、法令遵守状況等について情報共有すること、コンプライアンスの推進活動を展開してきました。

公益通報制度の窓口及び対応業務は、2017年のコンプライアンス推進室設置に伴い監査室から業務を移管し、2018年1月からは京都市内の法律事務所を法人外公益通報窓口として設置し、通報者に通報窓口の選択肢を広げること、法人内窓口へ通報しにくい向きも安心して利用できる体制を構築しています。公益通報制度は、通報により本法人の潜在的な課題（コンプライアンスリスク）の早期発見ツールとして機能することが期待され、通報に通報に対する様々な対応等により、コンプライアンスの向上に貢献する側面も有します。

同志社コンプライアンス推進委員会の活動として特筆すべきは、次頁に掲載しています2019年7月27日付の同志社コンプライアンス指針の制定です。

本法人は、同志社コンプライアンス指針において、同志社におけるコンプライアンスの考え方を学内外に向け宣言しました。

2022年度の活動

(1) 昨今、国内において人種や民族、国籍の多様性が高まっており、それらを理由に苦痛を与える発言や行動をする、レイシャル・ハラスメント(以下「レイハラ」という。)が社会的な問題となっています。

2022年度のコンプライアンス研修は、法人内各学校においてグローバル化が推進される中、教職員がレイハラについて正しく認識することにより、各学校におけるレイハラの発生を未然に防止することを目的とし、「キャンパス・ハラスメントを考えるーレイシャル・ハラスメントを通してー」というテーマで大学の檜垣伸次法学部教授を講師として開催し、無意識の偏見や差別によって、日常的な些細なやり取りの中で悪意なく誰かを傷つけてしまう「マイクロアグレッション」が積み重なり、環境型ハラスメン

トとなりうることを学びました。

(2) 近年、学校法人の信頼失墜を招きかねない不祥事が繰り返して発生しており、学校法人がその社会的責務を適切に果たしていくため、いっそうのガバナンス強化やコンプライアンス推進が求められています。

本法人のガバナンスについては、日本私立大学連盟の「私立大学ガバナンス・コード」を採用し、ガバナンス体制について点検、改善が進められています。一方、コンプライアンスについては、同志社コンプライアンス推進委員会の下に入札に関する検討部会(座長・高杉直企画部長)を設置し、計4回にわたる検討部会を経て答申が作成されました。この答申に沿って、発注案件に関する入札等監視委員会規程が2023年4月1日付で施行され、新たなコンプライアンス推進活動が始まります。

同志社コンプライアンス指針

学校法人同志社(以下「本法人」という。)の業務に従事する社員・その他の職務従事者(派遣社員、業務委託先社員等も含む本法人の職務に従事する全ての者)(以下「社員等」という。)は、学校教育に携わる本法人が担う社会的責任と公共的使命の重要性を認識するとともに、建学の精神に基づく「良心教育」を標榜する本法人の一員であることを自覚し、社会から信頼される存在でなければなりません。

社員等は、法令・法人内諸規則等の遵守はもちろんのこと、社会規範に従い、高い倫理観を持って誠実かつ公正・公平に行動するものとします。また、社員等は社会からの要請に適切・適切に応えながら、本法人の目標達成のためにどのように行動するべきかという意識を常に持って行動することにより、本法人への社会からの信頼確保に努めます。

つきましては、すべての社員等がとるべき行動のよりどころとして、次のとおり、行動指針を定めます。

私たちは、この行動指針を理解・認識し、常に実践します。

- (1) 本法人の建学の精神に基づく「良心教育」に則り、学生・生徒・児童・園児(以下「学生等」という。)の道徳心を磨き、品性を高め、健全な精神の育成に努め、単なる技術や才能ある人物の育成のみにとらわれず、いわゆる『良心を手腕に運用する人物』の養成を目指します。
- (2) 本法人が掲げる目的や社会的使命を自覚するとともに、それを実現するため、教育、研究、社会貢献活動等に真摯に取り組めます。
- (3) 研究活動の実施及び研究成果の発表にあたっては、社会の信頼と負託を受けていることを強く意識し、得られたデータや結果の捏造、改ざん、及び他者の研究成果等の盗用などの不正行為を排除し、常に高い倫理観のもと誠実かつ公正・公平に行動します。
- (4) 本法人の活動が、学生生徒等納付金、寄付金、補助金等によって支えられていることを認識し、経費の適正な使用に努めます。
- (5) 本法人が地域社会の一員であることを自覚し、その責任を果たすとともに、積極的な情報発信・公開を通じて、本法人に対する理解や信頼の確保に努めます。
- (6) すべての利害関係者に対し、常に誠実な態度で接し、健全かつ公正・公平な関係を維持するよう努めます。
- (7) 一人ひとりの人権と人格を尊重し、人種、国籍、出身、性別、性的指向、宗教、信条、障がい、職業・職種、社会的身分などによる差別、偏見及びハラスメントにつながる言動は厳に慎み、社員等及び学生等がお互いに信頼し、安心して学び、働くことができる良好な環境づくりに努めます。
- (8) 教育・研究に携わる者として機密の保持と個人情報保護を徹底し、情報発信や情報の管理について細心の注意を払います。

以上

ドイツ連邦共和国大統領が同志社大学を来訪

大学

2022年11月3日にドイツ連邦共和国のフランク・ヴァルター・シュタインマイヤー大統領が、同志社大学今出川キャンパスを訪問され、良心館2階のラーニング・コモンズで開催された気候変動に関するパネルディスカッション「25 years after the Kyoto Protocol - Progress and Challenges (京都議定書から25年―進歩と挑戦)」に出席されました。

シュタインマイヤー大統領は、11月1日から3日まで日本を公式訪問され同志社での行事に出席されたものです。

はじめに、植木朝子大学長が歓迎の挨拶をされたあと、シュタインマイヤー大統領が基調講演をされました。大統領は、11月6日からエジプトのシャルム・エル・シェイクで開催される国連気候変動枠組条約第27回締結国会議(COP27)の前に、京都議定書締結に踏み出した25年前の第3回会議(COP3)を踏まえて「私たちが暮



研究開発推進機構

らすこの地球を守るには、全ての国々が結束のもと努力し、研究を進め、世界トップクラスの頭脳が打ち出すイノベーションを生かし、世界的な気候変動の進行を抑制するしかないのです。」「私たちは京都議定書の精神を生かし続けなければなりません。いかなる危機があろうとも、私たちは京都議定書の精神から後退してはなりません。むしろ、その精神を超えていかなければならないのです!」(日本語訳…ドイツ連邦共和国大統領府ホームページより <https://www.bundespraesident.de/SharedDocs/Reden/DE/Frank-Walter-Steinmeier/Reden/2022/11/221103-Diskussion-Universitaet-Kyoto.htm> 参照) と力強く演説をされました。

基調講演を受けて、後藤琢也学長補佐・理工学部教授・カーボンサイクル教育研究プラットフォーム代表がモデレーターとなって日本とドイツの4人の専門家、Anders Levermann氏(ポツダム気象影響研究所複雑系科学研究





部門長）、Danielle Jarski氏（RWE Renewables 社洋上風力事業 最高開発責任者（CDO）、竹本和彦氏（東京大学未来ビジョン研究センター特任教授）、大林ミカ氏（自然エネルギー財団事業局長）によるパネルディスカッションが行われました。COP3 当時に思いを馳せるとともに、京都議定書以降の進捗を振り返って我々が今、何をしていくべきかそれぞれの立場から意見が述べられました。つづいて、専門家と同志社大学及びチュービンゲン大学日本研究センター（TCJS）の学生とのディスカッションが行われました。学生による活発な質問に応えて、専門家から気候変動防止のための対策について見解が述べられました。シュタインマイヤー大統領はこれらの白熱したディスカッションを終始熱心に耳を傾けておられました。最後に、後藤教授が「私たちは気候目標を達成するため、より速く、より広く、共に歩まなければならない。」との総括を述べて、ディスカッションを終了しました。

東京、京都での多忙な訪日スケジュールの中でシュタインマイヤー大統領夫妻の来学の榮譽を得ることができました。今回のイベントを通じて、気候変動について様々な視点から考え、両国の専門家とディスカッションできたことは、同志社大学及びチュービンゲン大学日本研究センターの学生にとって新たな気づきと交流の機会となりました。大変有意義なものとなりました。

大統領が基調講演でも触れられましたが、2023年はチュービンゲン大学同志社日本研究センターの開設30周年にあたります。本学の関係者とともに今回のイベント実現のためにご尽力いただいたミヒャエル・ヴァフトウカ所長にこの場をお借りして感謝申し上げますとともに、チュービンゲン大学との交流がさらに深まることを願っています。

同志社大学では、2021年6月に、持続可能な社会構築のために「カーボンリサイクル」をテーマとした産官学の連携を基軸にして、教育、研究及び研究成果の社会実装を推進することを目的とした「同志社大学カーボンリサイクル教育研究プラットフォーム」(<https://cpf-doshisha.com>)を開設しました。CO₂を炭素資源と捉えて再利用するための技術開発を行い、地球温暖化の問題解決のために貢献することを目指しています。研究開発推進機構としてもカーボンニュートラルの実現に向けて寄与できるよう、着実に取り組みを進めていきたいと考えています。



（左から）ヴァフトウカTCJS所長、シュタインマイヤー大統領、ビューデンバンダー大統領夫人、榎木大学長

日本語日本文学科「表象と表現」科目群

―社会とつながり、アウトプットの力をつける―

女子大学

「日本語日本文学科」の伝統と改革

同志社女子大学日本語日本文学科は、伝統的に「国文」と呼ばれてきた分野を研究教育内容とする学科ですが、その伝統に加え、近年のカリキュラム改正で積極的な二つの拡張を行いました。一つは、「文学」すなわち、文字表象にとどまらない、絵巻物や映画など視覚表象を対象とする分野を専門領域に位置付けたことです。学生たちが絵画や映像を用いた作品に強い関心を向けるのは現代の当然の流れで、それらのゼミは大変好評です。

「表象と表現」科目群設置の意義

もう一つの拡張は、上記の基幹科目の外側に「表象と表現」科目群を配置したことです。この科目群の特徴は二つあります。一つは学生自身がアウトプットすることです。自ら学ぶ、能動的な授業形態を持つ科目であること、もう一つは、実際に言葉を使って仕事をされている方々に指導をお

願っていることです。

「日本語日本文学科」の授業は多くの作品や文献を読むインプットの活動が中心となります。もちろん各学年の演習を経てその成果を卒業論文としてまとめるという、伝統的なアウトプットの方法は重要な教育の柱となっており、卒論執筆の経験は人生の確かな土台を作ります。しかし一方で、4年間で現代社会に出ていく学生を育てるという視点に立てば、より主体的に、かつ、直接的に短いサイクルで反応が得られる活動を通して人や社会と関わり、学びを得るという形のアプローチも必要でしょう。このような考え方のもと、伝統的基幹科目の周囲に「サテライト（衛星）」のように配置したのが「表象と表現」科目群です。

具体的な科目と内容

具体的には、朗読・スピーチ・編集技術・コピーライティング・絵本研究・クリエイティブライティング・映像制作・身体表現・京都の劇文学とワークショップ等の科目が

日本語日本文学科

森山 由紀子
もりやま ゆきこ

あり、それぞれ、プロのアナウンサー・編集者・ライター・コピーライター・絵本作家・小説家・舞台俳優・元TVPロデューサー・能楽（狂言）師といった、言葉のプロフェッショナルを講師としてお願いしています。内容の一例を挙げると、「編集技術」では、企画、取材、記事の執筆、編集、デザイナーさんとのやり取りといった一連の作業を経て、毎年1冊の冊子を作ります。「制作」では、脚本、演出、撮影、編集、広報等を含め、映像作品（ドラマ）を制作・上映します。

表象と表現科目群が目指すもの

もちろん、これらの科目が扱う「表現」は、半期（一学年）の間取り組んだとしても、その世界のほんの入り口を覗くことしかできません。ここでの出会いをきっかけに進路を定めた卒業生もありますが、本来これらの科目は、職業への接続を目指していません。しかし、社会人の方と接することはそれだけで意義深く、しかも、言葉を使う現場は、日ごろ何となく享受している表現への理解を深め、新鮮な気付きを与えてくれます。目的を持ち、細部に気を配



「絵本研究」の作品展示風景。授業では全部で3種類の絵本を作る。

って協働し、何かを作り上げる機会は、従来型の日本語日本文学の授業からは得がたく、何よりも、もの作りの活動は楽しく、やりがいがあった、学生たちを生き生きと輝かせます。数値化は難しいですが、学生が多様な才能を発揮する機会があることは、基幹科目の学びにも間違いなく活力を与えます。さらに、俳句の創作などは受講後も日常生活に取り入れて楽しまれており、コンテストに入賞することもしばしばあります。今年度は、伊藤園の「おいしいお茶 新俳句大賞」で学校賞を受賞しました。

このように、同志社女子大学日本語日本文学科は、長年蓄積された知の継承を大切にしながら、常に新しく、主体的に言語・文学・文化と向きあう力を持つ人物を育てる工夫を重ねていきたいと考えています。



大学名が入った「お〜いお茶」のボトル



「編集技術」で制作した冊子。

同志社クローズ・アップ

同志社創立150周年記念企画

プロジェクト・マッピングin同志社今出川キャンパスの取り組み

中学校・高等学校

教諭
反田 任
たんだ たかし

2022年11月22日、同志社創立150周年企画として、本校の中学生が所持しているiPadでプロジェクト・マッピングを制作し、同志社大学今出川キャンパスの良心館・彰栄館の壁面に投影し、大学生・教職員をはじめ、多くの一般の方々にも光が織りなす映像と音のハーモニーを楽しんでいただくことができました。この取り組みについて詳しく紹介します。

企画を提出するに至った経緯

本校では中学校の「学びプロジェクト」プログラミング講座で2019年より毎年、クリスマススの時期にiPadのアプリでプロジェクト・マッピングを制作し、リース・チャペル（礼拝堂）に投影してきました。今回の企画応募にあたってはこれまでのノウハウを活かし、待降節の時期に今出川キャンパスで点灯される大ツリーのイルミ

ネーションとあわせてプロジェクト・マッピングを楽しんでもらおうと考えました。テーマは同志社に関係するものとして「キリストの降誕」と「同志社の歴史」に決めました。

企画のキックオフは9月10日にオンライン会議を行い、「学びプロジェクト」に参加を希望する17名の生徒が参加しました。キックオフでは企画の概要と今後の進め方、プロジェクト・マッピングの制作方法などについて確認し、制作に取りかかり始めました。制作途中で、二条城や平安神宮のプロジェクト・マッピングをプロデュースされているネイキッドの中川伸作ジェネラルマネージャーに直接お話を聞く機会も持ち、プロジェクト・マッピングについての見識も深めました。

制作過程

プロジェクション・マッピングの制作にあたって、まずやるべきことは、投影する建物に実際にプロジェクターで光を投影し、照射範囲を決めて、建物の画像を撮影します。その画像が実際に映像を載せていく「型紙」となります。

映像の制作過程では、テーマごとに3つのグループに分かれ、さらにその中で細かく分担をしました。「キリストの降誕」を担当したグループでは、iPadのアプリで絵を描いたり、描いた絵の動かし方や見せ方、場面と合わせたBGMの選定や制作を何度もやり直すなど、苦労も多々ありました。また「同志社の歴史」を担当したグループでは同志社の変遷を白黒写真から現代に繋げるということで、白黒写真のカラー化に取り組みました。年代別に写真を分類し、AIを使ってカラー化しましたが、そう簡単なかではありません。AIでカラー化した画像をさらに現実に近い色合いに近づけるため、現存している建物の写真を探したりしながら画像修正アプリやデジタルペンで色を塗ったりして、色彩調整を行う作業は大変でした。1枚の写真のカラー化に1日から2日を要することもありました。同志社創立150周年記念ロゴの制作チームでは、2021年夏の東京オリンピックのドローンによる光の演出をヒントに、光のドットが集まってロゴを形成するという細かい作業を行いました。

投影の当日は投影テスト後、良心館、彰栄館の壁面に4回ずつプロジェクション・マッピングを投影し、中高生、大学生、教職員はもとより多くの市民の皆様にもご覧いただくことができました。イベントを終えてのアンケートでは85パーセントの生徒が「再度取り組んでみたい」と回答し、自分達が制作した作品に対してご覧いただいた方々からの賞賛の声や拍手をいただき、満足感や達成感を十分感じる手応えがあったと思われまふ。

今後も生徒・学生の創造性を引き出し、ICT活用スキルを向上させるこのような取り組みを継続していきたいと思ひます。



プロジェクション・マッピングの様子

海外語学研修再開 ——ポストコロナの海外研修——

香里中学校・高等学校

国際委員会委員長

瀬尾^{せお}

治興^{はるおき}

再開までの道のり

香里中高では例年、夏期に約3週間、中3・高3生を対象にニュージーランドとカナダで隔年、語学研修を行ってきました。春期にも約10日間のプログラムを、中3・高2生を対象にアメリカとイギリスで隔年実施してきました。

2020・21年度はコロナ禍のため、海外のプログラムを休止せざるを得ませんでしたが、2022年度当初は新型コロナウイルスの新規感染者数が下げ止まり傾向でした。そのような状況下、教育現場におけるウィズコロナの在り方を模索する中で、高校生を対象とした海外語学研修再開に舵をきることとなりました。

プログラム再開にあたり、研修先での緊急時の医療体制が盤石なバンクーバーを研修地に選びました。4月下旬に説明会を実施したところ、定員34名に対して200名以上の生徒が集まりました。高校の在校生は約900名です。5人に1人以上の生徒が説明会に参加したことになりました。コロナ禍で長期間、制限された学校生活を送ってきた生徒達が、リアルな人とのつながりを強く求めている表

れではないでしょうか。

生徒達の熱気

本校では各種留学プログラム（年間・短期・チーム）については選考試験を実施し、合格者を派遣するという形をとる一方、語学研修に関しては『海外に行きたい』という気持ちを大事にしているので、成績に関係なく、希望すれば参加できます。応募者が定員を超えた場合は抽選で参加者を決定しています。

クラブ活動と学習の両立を目標に掲げる生徒が多いので、大会等に影響が少ない、中学3年生の春休みと高校1年生の夏休みに語学研修への参加を希望する者が多いのが本校の特徴です。昨夏の語学研修は最終的に80人弱の応募があり、抽選倍率は2倍を超えました。抽選会への参加は任意でしたが、応募者のほとんどが集まり、会場はまるでオリンピックの試合を応援しているかのような熱気を帯びていました。

ある生徒はラグビーと海外研修、どちらにも全力でチャレンジしたいが、高1の夏休み以降は大会の日程的に参加が難しいという中で抽選会に参加しました。抽選に外れて

しまった彼の目に光るものを見た時、さらにプログラムを拡充していくことを心に誓いました。

出発から帰国まで

7月にはオミクロン株による第7波が押し寄せ、中止も頭をよぎりましたが、何とか出発に漕ぎつけました。カナダ入国後のランダムに行われるPCR検査で無症状ながら陽性となった生徒が1名でて、しばらくホームステイ先での待機を余儀なくされたものの、プログラムの終盤には活動を再開できました。

現地で生徒たちは、バンクーバー市内でホームステイしながら、地元の語学学校に通って授業を受け、英語による創作劇を演じたり、豊かな自然の中でウォーキングツアーやショッピングモールでの買い物、北アメリカの伝統的な装飾品作りなどを楽しんだりしました。

帰りのフライトは成田に18時25分着、コロナ禍で入国審査にかなりの時間がかかる為、当日の伊丹への乗継便は利用できず、東京で1泊してから帰阪でした。私は伊丹空港の到着ロビーで生徒を出迎えましたが、東京で一晩を過ごした後ではあるものの、生徒たちは「楽しかった」「もっとカナダにいたかった」「また行きたい」と話し、その表情からは冷めやらぬ興奮が伝わってきました。驚いたのは、生徒の1人が開口一番、「この体験をみんなにプレゼンさせてください」と訴えたことでした。出発前は自ら積極的にコミュニケーションをとるタイプの生徒ではなかったのに、たった2週間でこんなにも変わるのだと、実体験

と異なる環境に身を置くことの大切さを実感しました。

今後の課題

一方で今春に予定していたポストンでの語学研修は数名の申し込みもなく、最少催行人員に至らず、プログラムの中止を余儀なくされました。主な要因は費用面であると考えられます。10泊11日の行程で燃油サーチャージを入れると80万円を超えるという驚くべき金額でした。

ポストコロナの海外語学研修を進めていくにあたっては、生徒や保護者の高いニーズと航空運賃、燃油サーチャージ、宿泊代金の高騰に加え、円安トレンドといった逆風の狭間でいかに魅力的なプログラムを作っていくかが課題です。

費用面でのネガティブな要因が今後すぐに解消される可能性は高くありませんので、費用対効果を上げるには滞在日数が長いプログラムを中心に企画・立案していくことが重要です。また、本校はこれまで学校主催のプログラムにこだわってきましたが、外部委託のプログラムもうまく活用すること、生徒の選択肢を増やしていくことも視野に入れ、海外研修制度を以前にも増して魅力的なものにしていきたいと考えています。



中2中3・高校修養会

女子中学校・高等学校

教諭 長谷川 晃仁
はせがわ あきひと

はじめに

本校では中学1年生全員を対象に「『同志社で学ぶ』」自分を見つめて、友達を理解して隣人になろう」というテーマで修養会を実施しています。また中高生のさらなる修養を期して、毎年秋季に中2中3・高校修養会を企画しています。仲間との語らい、講師の先生のメッセージ、静かな祈りを通して、世に派遣される同志として絆を深めることが修養会の目的です。

記録が確認できる限り1950年から開催されている修養会ですが、2022年は9月10日（土）に校内で、日帰りで実施されました。例年は同志社びわこリトリートセンターに宿泊していますが、2020年度から2022年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から校内で宿泊はせずに実施しています。

毎年高校生約65名、中2中3約40名を募集しています。

直近の3年間は中高宗教部・修養会パートのメンバーを中心に約30名から40名の生徒が参加しました。

修養会に向けた準備

修養会のテーマや講師としてどなたをお招きするかといった大きな内容から、レクリエーションは何をするかといった細かい内容に至るまで、生徒が中心となって何度も話し合いを重ねて決めていきます。授業期間だけでなく夏休みも4日ほど準備のために登校するので、予定を合わせることも含め大変ですが、自分たちで考えて決めるという事を大切にしてもらいたいと思っています。

5月 テーマの決定、講師の先生の決定

6月 参加者募集、大まかなプログラムの決定

7月 主題聖句、役割、グループ、グループワークの内容、レクリエーション、讃美歌の決定

8月 しおりの完成、修養会に向けて説明会

テーマ・講師

2022年度修養会テーマ「人種差別をどう無くしていくか」
講師 柳井一朗先生（日本基督教団洛西教会牧師）
主題講演「人間の罪と神の義々変えさせる力を信じて」

当日の流れ

オリエンテーションで当日の予定を確認した後、開会礼拝では讃美歌を歌い聖書を読みました。続く柳井先生の主題講演では、私達一人一人が世界を良くしていくための希望であるとメッセージをいただきました。

次に中高生に分かれてレクリエーションを行いました。ジェスチャーゲームや、絵の内容を言葉で伝え元の絵を再現するゲームを行いました。お互いの緊張がほぐれたとこ



生徒によるしおりの表紙

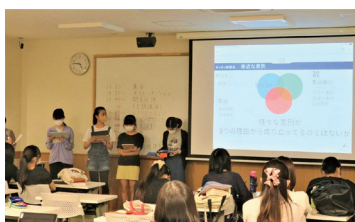
ろでグループワークを行いました。それぞれ「黒人差別」「在日外国人の差別」「アイヌ・琉球民族の差別」「身近な差別」というテーマに分かれ、各自が調べてきたことを話しあいました。

続いて再び全員集まり、グループで共有したことをまとめて発表しました。柳井先生から発表について講評をいただき、差別について一人一人が知識を身につけることが、差別の無い世界を作る一歩であるという考えを共有しました。

発表の後は閉会礼拝を行いました。ペンライトの灯りの中、讃美歌を歌い聖書を読み、代表の生徒や教員のメッセージに耳を傾けました。最後に献金を行い、司会の生徒のお祈りと黙祷で修養会を終えました。



グループワークの様子



発表の様子

献金

閉会礼拝の中で集まった献金は、グループワークでアイヌ民族・琉球民族について扱った班があったので、講師の先生の御推薦で「知里幸恵 銀のしずく記念館」と「日本基督教団佐敷教会」にお送りしました。

生徒の感想

修養会を通して感じた事、学んだ事を参加者に書いてもらっています。講師の先生のお話を聞いて「それまでの自分とは違う新しい自分、隣人と共に生きる自分になってほしい、というメッセージが心に響きました。(中3)」といった感想や「人間は罪を犯してしまうというお話が印象的でした。それでも神様は私たちを赦し、見守って下さっていることを忘れてはいけないと改めて思いました。(高3)」といった思いを書いてくれた生徒がいました。またグループワークなどを通して、貴重な経験をしたと感じている生徒が多かったです。

報告礼拝

修養会で学んだ事を多くの生徒にも知ってもらうために、中高それぞれの担当の生徒達が朝の礼拝で話をしました。

終わりに

修養会に向けて生徒も教員も準備のために多くの時間を費やします。付き添い教員も各グループが実りある話し合いを行えるようサポートします。生徒が普段の授業や部活動などとは異なる雰囲気で一生涯に人権や宗教のことなどについて語り合う様子を見ると、修養会が本校の教育において欠かせない要素であると強く感じます。一日も早くコロナ禍が終息し、修養会が以前と同様によりパワフルで充実した宿泊行事として復活することを待ち遠しく思っています。

DES脱プラお菓子キャンペーン〜6年生SDGsプロジェクト〜

小学校

理科教諭

かわさき
川崎 公美子

2022年11月、SDGs学習の一環として、京都府菓子工業組合青年部（注1）と6年生が協働して「DES脱プラお菓子キャンペーン」（注2）を開催しました。これは、京都府の6つのお菓子屋さんで、購入したお菓子を家から持参した容器に直接詰めてもらうことで、プラスチックごみを減らすとする取り組みです。キャンペーンに参加した子ども達の中には、コーヒード豆の空き缶や、お弁当箱など、お菓子の種類によって様々な容器を使い分ける工夫をしている様子も見られました。また、プラスチックの問題について考えるだけでなく、京都のお菓子屋さんの良さを体験できる機会となりました。

道草教育とSDGs学習

日々の学習とくらしをつなぎ、世界の問題を自分ごととして考える機会として、5、6年生では京都ユネスコ協会と連携してSDGsの協働学習に取り組んでいます。理科

の学習は自然環境やエネルギー問題と関わる内容が多いため、日々の授業の中で問題提起の機会を積極的に設けるようにしています。

SDGsには、1つの問題を解決しようとすると、別の新たな問題が発生するようなものもあります。だからこそ、

正確なデータに基づいて公正に判断したり、多角的に考えたりしながら、世界中の国々が協力して進めていくことが求められているといえます。同志社小学校のSDGs学習でも、できるだけ多様な意見を引き出せるような雰囲気を作りたいです。つまり、様々な個性をもった子ども達がそれぞれの能力を発揮し、仲間と共に問題に向かう過程に価値をおくところが、道草教育に基づいたSDGs学習



イチゴ大福をタッパーに詰めてもらう様子

の特徴だと考えています。

はじまりは岩倉川

5年生の理科では、川の水は海へ流れ、様々な生き物に影響を与えていることを学びます。岩倉川での野外実習の際、お菓子の包装、レジ袋、ペットボトルなどのプラスチックごみがたくさんあることに気づきました。「なぜ？」という素朴な疑問から発展して、地域のボランティア団体「岩倉川を守る会」の会長や、川ごみの研究者である原田禎夫先生^(注3)を招いて学習しました。そして、「自分たちにもできることをしたい」という声があがり、2021年12月から子ども達の有志による岩倉川の清掃活動がはじまりました。清掃活動に参加した子どもたちは、クラスや全校集会で発表し、川のごみを減らす対策について話し合う機会をもつようになりました。その結果、ポイ捨てごみを防ぐと同時に、そもそも、プラスチックの使用を減らすことも考えなければならぬのではないかという意見をもつ子どもが増えていきました。

京都のお菓子からよりよい未来を創る

そこで、京都府菓子工業組合青年部に協力していただき、これまでの学習の中で疑問に感じていたことをオンライン

でインタビュースることになりました。子ども達の質問に対して、店主さんたちからは衛生面・安全面・コスト面などにおけるプラスチックの長所を教えていただき、環境問題と便利なくらしの両立の難しさに気づくことができました。その結果、環境にもお菓子屋さんにもどちらにも負担が少ない方法として、お弁当箱などのフタ付容器にお菓子を直接詰めてもらうキャンペーンの実施が実現しました。

お菓子屋さんから依頼された課題

このキャンペーンを開催するにあたって、お菓子屋さんからは「衛生的に、形状や品質を損なわずに」商品を受け取るための注意点や生菓子の扱いに関するルールやマナーについての周知徹底をお願いされました。6年生達は、普段から交流のある縦割り班の下級生たちをイメージしながら、「ルール説明動画」「ポイントカード付きパンフレット」「お店のPR」「ポスター」「景品」など、さまざまな手段を考案し、実行していきました。

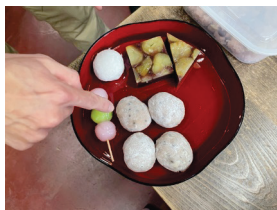


あられを100g量り売りする様子

プロジェクトで得られたもの

今回のプロジェクトにおいて、特に大切にしたことは、6年生の子どもたち一人ひとりが問題を自分ごととして考へることができているかどうかという点です。はじめは乗り気ではなかった子どもも、「京都のお菓子屋さん」から依頼された問題をみなで話し合いながら解決していくうちに、プラスチック包装の問題が自分ごとに変化し、行動力へと変わっていきました。各クラスの代表者が行う店舗紹介のプレゼンでは、6年生全員が背筋を伸ばして真剣に聞き入り、大きな拍手と共に一体感が生まれていました。そして、この6年生のエネルギーが下級生たちにも伝搬し、学校全体の取り組みへと展開していききました。

“脱プラ”キャンペーンを終えた12月、6年生達は「廃材」「アップサイクル」「食品ロス」など、すでに新たなプロジェクトに向かっています。SDGsという世界



重箱に詰めた生菓子



紅茶の缶に詰めたあられ

共通の目標を軸に、身近な問題に目を向け、自分らしい方法で解決しようとする子ども達を、これからも応援し続けたいと思います。



お菓子ごとに別の容器で購入

注1…京都府菓子工業組合の次代菓業の担い手からなる組織。

京都の小・中・高校での「学校巡回菓子教室」や「お菓子の科学プロジェクト」などを積極的にを行っている。

注2…「Doshisha Elementary School 脱プラスチックお菓子キャンペーン」の略。6年生の実行委員会（SDGsカンパニー）で決めたキャンペーン名。

注3…大阪商業大学公共学科准教授、同志社中高卒業同志社大学経済学部卒業。同志社大学大学院経済研究科博士後期課程単位取得。

（協力いただいた店舗）

武保あられ

井津美屋京菓子司

井津美屋イオンモール五条店

幸福堂

大福餅老舗

京鳴海簞庵